

## 少年期の世之介

鈴木 亨

### 一

『好色一代男』全八巻五十四章が『源氏物語』五十四帖に擬して構想されていることは周知の通りである。もとよりそれは西鶴好みの数合せの一種であつて、光源氏とは異なり主人公世之介は序章より終章に至る全章に登場する。即ち紛れもなくこの作品はその主人公の好色修行一代記の形をとっている。

しかしこれについては次のような重要な指摘も屢々行われる。例えば、

本書は主人公世之介の生涯を主題とした長篇小説でもない。世之介は世之介といふ個体的な存在ではなく、世之介といふ名によって代表せられた多くの浮世男・好色男・当世男の複合的存在である。いひかへれば無名の多くの浮世男・好色男・当世男が世之介といふ一つの名を与へられて、五十四章の全部に顔を出してゐるが故に、あたかも世之介といふ一人の主人公の生涯を發展的統一的に描いた長篇小説であるかの如き錯覚を起させるのである。だから本書の主人公は、厳密には世之介の名によって象徴せられた「浮世」である。「好色」である。<sup>(注1)</sup>「当世」である。

一般に西鶴の小説は短篇集の形をとるものが多く、たとえ長篇の形を採るにしても、その長篇的結構は極めて脆弱であるといわれる。<sup>(注2)</sup>即

少年期の世之介

ち世之介一代記の如き体裁を装う『好色一代男』にしても、一章一章の独立性が強く、各章間の構造的連関は稀薄、ただ一つのイデー、一つの主題のもとに集積された短篇小説集、『短篇小説の花輪』<sup>（注3）</sup>と見るを可とする意見が多い。

長篇小説としては主軸をなすべき主人公については、更に次のようにも論じられる。

「二代男」は一代記であり、一おう長篇の構成をとつてゐるが、元来主人公の世之介は特定の性格や運命を持った個性的人間ではなく、時代の典型であり、その典型の成長していく過程と成長後の生を、人間の一生に仮託して描いたものである。であるから建築的な構成とか、運命の発展とか、性格の変化とかを重視する近代的なロマンの尺度で計るべき性質の作品ではないのである。<sup>（注4）</sup>

つまり一代男世之介は、時代の好色生活の実践者の典型として描かれているのであって、特定の個人として描いたものと見るべきではないのである。

勿論時代の典型ということになれば、特定の個人のように一色、単一のものであり得る筈はない。広汎な好色生活の各分野に関わる様々な人物の個性、境遇、年齢、教養（色道の熟達度）等の差異によって、その具体的な形相は随分多様である筈である。それらを出来るだけ広く網羅しなければ、時代の姿は描き切れないであろう。網羅するには、西鶴が他の武家物・町人物でも多用したように、短篇小説集の形にするのが有利であり、合理的である。極めて自由に多彩な人物・場面を用いた個々の作品を集積出来るからである。然らば何を苦しんで主人公を限定し、首尾一貫の構成を必要とする長篇小説の形をとらなければいけなかったのであろうか。既に世間によく知られた人物をモデルにした『枕久一世の物語』の場合等とは、完全に目的が違ふ筈ではないか。

如何に複合的人物であるとは云え、「世之介」という個人名を与えられた主人公は、同時に複数の人物を兼ねることは出来ず、経歴も一筋に辿れるものでなければならぬ。そういう制約のある一人の主人公の好色生活を辿ること（長篇的構想）で、時代の好色生活の典型を広く見渡そうというのは甚だ無理なことである。勿論古く『伊勢物語』の昔男あり、『源氏物語』の光源氏があるが、西鶴の狙った世界は遙かに大きく、新しい。年齢的にも少年期から老年期まで、経済的には大富豪から極貧まで、地理的には三ヶ津はもとより、北は奥州・越後・信州、西は宮嶋・下関・長崎に至るまで、時代的にも当世より数十年の昔まで、女色のみならず男色まで、しかも昔話や夢物語でなく、同時代人によってすべてが検証され得る世界である。局面は千差万別、しかも個々の好色経歴は出来るだけリアルに描かれねばならない。多

数の人物が同時に各地で行動する大河小説の構想でも建てなければ、とても及び難い世界ではなからうか。

もしそれを可能にする単一の主人公があるとすれば、それはスーパーマンである。好色スーパーマンである。世之介は確かにスーパーマンとして構想された。生涯に戯れた女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人という途方もない数字が、早くも開巻第一章の末尾に麗々しく掲げられる。「うないこより已来腎水このかたをかえほして、さても命はあるものか」と驚嘆するのは常人、さても命あるのがスーパーマンである。しかもこの数字は胡乱なものではない。世之介自身が克明に「手日記」に記録していたものを集計したものと言う。こういう事が世之介の異常な早熟ぶりを結果的に納得させるし、あらゆる場面に変幻自在に出没する「複合的存在」であることをも可能ならしめるのである。

常人には不可能な事を次々に実現して行くスーパーマン主人公、それは確かに当世の好色を広く描くというこの作品の主題にとって必要なものであった。しかし一方その姿を出来るだけ現実的に描くためには、そして同時代の同好の士の心からの共感を得るためには、主人公が単に超現実的であることは許されなかった。スーパーマンを現実的に描く、特定の主人公を設ける以上、これは西鶴に課せられた最初の難問ではなかったらうか。

## 二

後世、浮世草子の祖と見なされるに至った程の写実小説『好色一代男』である。その主人公は、常人以上の能力を秘めているにしても、慎重に現実的人間として造形される事が必要であった。

それには主人公である以上、まず小説の進行に伴なって展開する時間と空間の枠の中に、出来るだけ合理的にその成長や行動が組み込まれる事が第一であった。『源氏物語』の年立の構想がそれに大きな影響を与えている事は首肯出来る。如何に多くの経験が必要とするからといって、単なる見聞者ではないのだから、『大境』の世継や繁樹、『水鏡』の仙人のような超人的な高齢者を持って来るわけには行かない。特にこの場合「好色」が主題である。その実践者としての適応年齢には、単なる生命の持続よりも低い所に限界があると考えるのが現実的

である。光源氏にも匹敵する新時代の色道の達人の生涯を構想するにしても、年齢の限度は五十と六十という所であろうか。光源氏も幻の巻で五十二歳、その後数年以内に亡くなっている筈。五十四帖という巻数を章数に移すとして、年齢もそのあたりを限度にしてはどうか。世之介五十四歳までという構想の痕跡は、周知のように先引の生涯に戯れた女三、七四二人云々の記事に、「五十四歳まで」と誤記していること、又巻六目録の年立の誤記などに見る事が出来る。

しかし好色適応年齢の限界は高齢の側にばかりあるのではない。五十四章を五十四歳に配するには、一章一年という構成が、数理好きの作者には直ぐに浮かんだのであろうが、それでは主人公一歳の好色から始めねばならぬ。それは幾ら何でも無理であるので、光源氏七歳の文始め（桐壺）に合せて七歳の初恋から出発、それだけ後へずらして六十歳の女護ヶ島行きという運びで、一年一章構想を保持したものと思われる。

もとよりこれは奇想とも言える、余りにも形式的な構想であつた。しかし作者はその数理的均整に価値を感じたらしい。それを一層鮮明にしたのが、各章の分量の均整化であつた。即ち各章すべて二丁半、それに半丁の挿絵をつけて都合三丁で一章という原則を全章にわたって貫いたのである。翌年刊の役者評判記『難波の良は伊勢の白粉』でも同様な試みをしているが、これは評判記で、評判対象者に対する形式上の平等感をもたらすという効果が期待できたかと思われるが、一代記というスタイルをとる作品において、各年齢毎の記事の量を均等に配分しようというのは、甚だ非文学的な興味によるとしか考えられない。当然の事ながら人生においては、時間は均等に流れても経験の密度は均等ではない。その人生における意味も巨細様々である筈である。それを記述の量において均一化しようというのである。作者は此処においても、敢て不必要とも言える難問を抱え込んだことは明らかである。

次作『諸艶大鑑』では、主人公世伝は首尾両章に顔を出すだけで、実質的には短篇小説集である作品の大枠の形成に利用するにとどまつた。姉妹篇ともいうべき『好色一代女』では、主人公の老尼の回想談、懺悔話という枠に閉じ込めて、各章の年齢配置は多くの場合ばかり、その代りというよりむしろそれによって、主要な好色の流れを無理なく的確に捉える事に成功している。つまりこんな機械的な構想は『一代男』一度だけで捨てているのである。

尤も非文学的興味とは言ったが、俳諧師だった西鶴が、定型の一句々々を連ねて行く連句の作法と同様なものを、散文の小説においても

試みようとしたと考えられないでもない。定型詩的小説の創出である。後には多分に刊行上の都合が優先していると思われるが、黄表紙・合巻の各冊の量的統一、近代の新聞連載小説の各回の量的統一なども見られる。それらの先駆的な試みと見られない事もない。

更に言えば、時間の均質な流れと共に均等に積み上げられて行く物事の変化は、町人社会では特に注目された現象ではなかったであろうか。例えば『日本永代蔵』巻一ノ一、「初午は乗ってくる仕合」に、

せんぐりに毎年集りて、一年一倍の算用につもり、十三年目になりて、元壱貫のぜに八千百九十二貫にかさみ……

と、利銀の着実な増大に驚きを示し、同じく巻三ノ一「煎じやう常とはかはる問葉」に、

願ひのまゝなる利を得て、幾程なく四十年のうちに拾万両の内證金……

巻四ノ三「仕合の種を蒔銭」に、

年越毎に仕合かさなり、廿一より五十五歳迄卅四年に我とかせぎ出し、金七千両を一子にゆづりぬ。

巻五ノ三「大豆一粒の光り堂」に、

毎年利を得て三十年余りに千貫目の書置して……

等と見える。いずれも大金は一朝にして成らず、歲月の着実な歩みと共に着実に利を積む事によって大福長者となる事を示しているのである。

こういう時間と致富との関係は、既に『長者教』（寛永四年刊）にも説かれている。朝夕の食事に各二合半ずつ儉約すれば、途中で利を付けて貸出す事によつて、二十年で五千石に達するというような話である。それを更に現実的にしたのが、『日本永代蔵』巻一ノ三「浪風静に神通丸」の、北浜の米市場で筒落米を掃き集めて其の日暮しをする後家が、朝夕の食い余しを貯めて売り、二十余年に拾貳貫五百目にした話であろう。

恐らくこういう所から一歩進めて、西鶴は更に人生の年次的計画をすら提唱するに至る。

例えば、

人は十三才迄はわきまへなく、それより廿四五までは親のさしづをうけ、其後は我と世をかせぎ、四十五迄に一生の家をかため、遊樂

する事に極まれり。、『日本永代蔵』卷四ノ一、祈るしるしの神の折敷)

二十五の若盛より油断なく、三十五の男盛りにかせぎ、五十の分別ざかりに家を納め、惣領に万事をわたし、六十の前年より樂隠居して……(『世間胸算用』卷二ノ一、銀老奴の講中)

これらの引用、いずれも『一代男』より後の作品からであるけれども、こういう発想が早くから西鶴に芽生えており、一代男の色道の成長過程の表現にも同様の年次的構想が持ち込まれた、それがひいては各章の年次と分量の均一化という構想につながったのではなからうか。

### 三

こういう年次的な均等性を持つ章立てに、かつちりと主人公の成長と行動を嵌め込むことによって、この作品はその長篇的構成をより有意義に確保しようとしたのだと考えられるが、更にこの形式美の追求を促したものとして、『色道大鏡』(延宝六年初稿成立)巻第五「廿八品」を想定することが出来る。

これは知られる如く、法華經一部八卷二十八品の構成に模して、色道の初心・野暮の段階から粹の最高の悟りの段階までを、整然と廿八品に分ち、更にその各品を例外なく二相ずつに分けて解説したものである。色道修行の各段階を順次示したものであるから、一代男世之介の成長段階との対比が可能なる所もあるが、抑も一般人を対象としたものだから、スーパーマン世之介の特殊な成長とは一致しなくて当然である。第一段階の無性品からして、「此品は男子英年の比ほひ、又わきをつめ、額にかどを入る時分の事也」とあって、世之介の第一段階七歳の恋始めとは肉体的条件が全然違ふし、世之介の袖ふさぎ(十四歳)、角前髪(十五歳)の章では、既に各地の色町の遊びにも経験を積み、大和仁王堂の飛子に戯れたり、後家に早、子供を産ませて、六角堂に捨て子したりする早熟ぶり、とても初心の段階に置く事は出来ない。

しかし、それにも関わらずこの「廿八品」の色道における修行と成道の段階的識別・整理の方法は、『一代男』の構成の重要な基盤となっていると思う。特に世之介が本格的な好色生活にはいる以前の少年期、如何に彼が色道においては最高の血統に生まれ、最高の環境に育つ

たとしても、色道修行そのものは後天的に初步から始めねばならぬ。先述の如く一年一章の年立で七歳からの出発となったわけであるが、如何に早熟を設定するとしても、肉体的条件の不備は、現実性に拘わる以上無視するわけには行かない。とすれば「廿八品」のように、自然な色情の発動を前提とする事も出来ず、益々ゼロに近い所から出発させねばならぬ。ゼロからスーパーマンの獲得までの落差は当然巨大で、現実的には「廿八品」の第廿七明了品（知命相・独尊相）、第廿八大極品（空色相・無心相）にまでは至らずとも、この間の多くの段階をかなりのスピードで、しかも着実に登って行く姿を見せなければならない。そうしなければ、「廿八品」の読者のように精密な修行過程の認識を持った読者を、現実的に納得させる事は出来ないだろう。

一年一章とすれば、先述の袖ふさぎ、角前髪の時期、或いは精々その次の元服の年（十六歳）頃までが少年期、巻一から巻二の半ばに達する十章程がそれに当る。普通なら大人としての本格的な活動が始まる以前の前史として、ざっと概括的に述べて済むところである。例えば『一代女』の主人公は、十三歳の初恋以前、「十一歳の夏はじめよりわけもなく取乱して」以下数行その早熟ぶりが述べられているに過ぎない。二代男世伝に至っては、「十四歳の時雨月さだめなや、父も母も世をさり給ふに、彼姥が後見して、今三十余まで、台所を見ず暮しぬ」とだけで、甚だ素気ない。この手の一代記ものの開祖とも言うべき『浮世物語』（寛文初年頃刊）の浮世房にしても、「浮世房なりたちの事」の一章に要約するにとどめている。それを「廿八品」の注意の下に、五十四章中の十章にわたって展開するのだから、この部分が従来の作品には見られなかった重味を持たされた事は言うまでもない。

勿論世之介の色道修行は少年期のみで終るのではなく、普通この作品の前半四巻二十八章（<sup>注5</sup>三十四歳）までが成長の過程を描いたものとされている。

前半の二十八章は理想像に成長するまでの過程、後半の二十六章は成長した世之介を舞台廻しとして粹の何たるかを描く、というように二分されています。<sup>（注6）</sup>

だから

後半の四巻の世之介は、すでに粹という美意識を体得し、もはや成長する余地のない粹人という設定なのです。<sup>（注7）</sup> その世界については、行動の変化があるだけで、成長の過程を考慮する必要はまったくないわけです。

従って『一代男』は前半の時間設定と後半の時間設定とは、全く意識が異なっている。後半も一章一年が貫かれているが、実は時間は流れていないも同然、等しく現代という枠の中で自由に時間を処理しているといわれるのである。<sup>(注8)</sup>

それに対して前半は、成長の過程を時間の経過に即して描こうとしている。章毎に示される年齢は、それだけ意味が大きいのである。特にそのまた前半の少年期は「廿八品」が想像もしなかった時期で、しかも好色スーパーマンとしては年齢毎の成長速度が格別に早い事が要求される時期である。浮橋康彦氏はこの巻一を中心とした時期を「幼時好色萌芽期」と名付け、巻二―巻四を「遍歴・放浪期」とする事によって、それぞれに特別の様相がある事を指摘された。<sup>(注9)</sup>

これ皆、一年一章構想に端を発し、特に七歳から始まる少年期にもその無理を強行しようとした結果なのである。

#### 四

結論から先に言えば、西鶴は見事にその無理を克服し、この奇怪な構想を成功させたのである。七歳からの少年期の一年々々を如何に世之介は修行し、成長して行ったか、それを十分に説得的に描き得たがために、この年次の記述は高い信頼性を獲得した。青年期から壮年期、老年期へと移ると、その間に大まかな推移は認められるものの、各年齢毎の段階的な変化は殆ど目立たなくなってくる。つまり年立の意義は著しく薄れて来る。五歳六歳、時には十歳位前後しても大して不都合は起らない。後半は既に粹の理想像に達した後の事と言う通説に従えば、変化の背景としての時間の流れは既に停止しているとすら見られる。そういう形骸化した年立でも、少年期の年次の記述の印象が鮮烈であったために、その信頼性を維持し、実質的には名妓列伝風の短篇小説集に変質していても、小説として空中分解を起すことなく、主人公の一代記的印象を最後まで持続する事が出来た。一代男が世之介という個人名を持ちながら時代の典型たり得たのも、実はそのあたりに拠る所が大きいのではないかと考える。

以上のような観点から、以下本稿は少年期の世之介像の造形を、敢て教養小説風に分析検討して見ようと思う。この部分の喜劇性については、既に多くの先学の精緻な論説がある。<sup>(注10)</sup> 確かに世之介の早熟ぶりは常識を超えており、その異常さが滑稽をもたらす事は否めないが、



その滑稽の中に、先述のような成長の実質が確実に捉えられている事を指摘したいのである。

#### 七歳 けした所が恋のはじまり

まず世之介の出生が語られる。父は但馬の国の大金持、しかも「浮世の事を外になして、色道ふたつに寐ても覚ても夢介」と替名に呼ばれる遊び人。母はその父に身請されたその頃名高き太夫、かづらき、かはる・三夕の三人の中の誰か。誰かとは曖昧な言い方だが、「あらはに書するす迄もなし、しる人はしるぞかし」と、如何にもモデルの实在を暗示するようで、しかもそれを明瞭にしたくないという書き方をしている。かなりの現実性と幾分かの神秘性を取り混ぜる面白い表現である。

色道成就の資質として、まずこの血統は非の打ち所がない。育った環境も豪勢にして優雅、六歳までは事もなく、七歳の夏の夜、初めてこの異常児がその資質の片鱗を露わす事になる。

夜中に小便に起きる世之介、そのあくびの声を聞きつけて、「おつぎの間に宿直せし女」が手燭をともして、遙かな廊下を先導して厠に至る。その帰り、

お手水のぬれ縁ひしぎ竹のあらけなきに、かな釘のかしらも御こゝろもとなく、ひかりなを見せまいらすれば、「其火けして近くへ」と仰られける。「御あしもと大事がりてかく奉るを、いかにして闇がりなしては」と、御言葉をかへし申せば、うちうなづかせ給ひ、「恋は闇といふ事をしらずや」と仰られける程に、御まもりわきざし持たる女息ふき懸て、御のぞみになしたてまつれば、左のふり袖を引たまひて、「乳母はいぬか」と仰らるゝこそおかし。

という事になる。

七歳の少年が何と貴族的な扱いを受けていることか。一寸厠に立つにも、お次の間に宿直する腰元二人（手燭係りと守り脇差持ち）が付き従い、それに乳母も少し離れて見守っているらしい。（挿絵―西鶴自筆―にはその姿も描かれている。）

この話の焦点は、「恋は闇」という諺の意味を世之介が誤解していた事にあるが、ともかく世之介は手燭の腰元に、このような形で初恋の心を告げたのである。

例の「廿八品」の第一、無性品、翫卑相に曰く、

抑人の子の婚姪のはじまるところは、やむごとなきかたとても、外よりはもとめず、めしつかはるゝ女中よりことおこり、町人以下奉公人までも、こしもと、物ぬひ・はしたものなどより犯しそむる物也。云々

世之介の初恋の相手が腰元だという所は、この条の指摘の通りである。しかし「其火けして近くへ」と呼びかけた心情は、今少し探究して見る価値があろう。

「恋は闇」についての世之介の理解は、確かに間違いであった。しかし、その誤解は恐らく恋の発動の後から生じたものであった。恋を感じて袖を引きなくなった時、明るい所でそれを行う事にふと躊躇を感じた。これが抑も恋の始まりではないか。身近にいる腰元の事である。子供なら気安く手を引かれ、或いはじゃれついた事も多かったに違いない。それがある日、突然異性として別の意味、感触を持つて来る。人目のある所で気安く触れてはいけないものになる。しかし触れたい。そこで「火を消して近くへ」という言葉になった。まさか恋とは知らぬ腰元が異議を唱えたと、いつか聞きかじった「恋は闇」の言葉が閃いたのではないか。

この場合の「闇」は譬喩である。それを本物の闇と誤解した所に滑稽がある。しかし彼の場合、譬喩としての闇が分かる程、反省的な経験などした事がない。「恋は闇」と聞いて、実感的に咄嗟に閃く理解は、正に本物の闇しかなかったのではなからうか。これを笑うのは酷である。事実誰も笑わなかった。

守り脇差を抱えた腰元が、息を吹きかけて望み通りの闇にしてやる。当の腰元が自分で火を消したとしたら、世之介の恋を受け入れた事にならう。それもあつて躊躇していたのではなからうか。だから気楽な立場の別の腰元が吹き消したのである。この辺の心理のあやも機敏に描かれているというべきであらう。

望みを達した世之介は、直ちに左の振袖を引く、その次の「乳母はいぬか」が又面白い。乳母は奉公人とはいえ母代り、腰元のように何でも言う事を聞くわけではない。そういう煙たい存在に知られたくない行為が、その次に予定されていたのか。闇の中で乳母を恐れる少年の心は幼くは、えましいが、恐れなければならぬ程の何かをたくらむ少年の心も、その蔭で見失つてはならぬと思う。

是をたとへて、あまの浮橋のもと、まだ本の事もさだまらずして、はや御こゝろざしは通ひ侍ると、つゝまず奥さまに申て御よろこび

のはじめ成べし。

勿論「本の事」(本格的性行為)が出来る年齢ではない。肉体の成熟度より精神の成熟度が遥かに早い、そういう色道の天才児である事が、初めて周囲に認められている。それを告げた腰元、聞いた奥様、「御よろこびのはじめ」とあって、どこにも好色に対するマイナスイメージが見られない。この場の「恋は闇」の恋は、恐らく大した実りもなく雲散霧消してしまった事であろう。しかしこういう周囲の状況では、応接に暇がない程の新しい刺激に見舞われ続け、世之介の修行また大きく加速されざるを得ない。こうして個々の恋には拘わらぬ、好色スーパーマンの基盤が着々と固められて行くのである。

世之介は姿絵(美人画)を集め始め、文車の文も見苦しい程になると、人々に自室への無断の入室を禁止する。そういう孤独の空間での成熟が必要な時期もあるのである。

ふどしも人を頼まず、帯も手づから前にむすびてうしろにまはし、身にへうぶきやう袖に焼かけ、いたづらなるよせい、おとなもはづかしく、女のこゝろをうごかせ

自分の肉体への自意識が芽生えて来ると、着衣等の際にも他人を排除するようになる。しかし衣類、香など次第に独自の好みを鍛え上げ、それが大人や女達にショックを与えて行く所が又天才たる所以である。

「恋は闇」で見た通り、彼は実感派である。如何なる知識も実感の裏付けなしでは納得できない。折紙の比翼の鳥、造花の連理の枝、これらも抽象的な知識を実際の形に見て、何らかの実感を感じようとする努力であろう。

雲に懸はしとはむかし天へも流星人ありや。一年に一夜のほし雨ふりてあはぬ時のこゝろは……

と、まことに要らぬ心配をするのも、傍から見れば滑稽であるが、実感派としては忽せに出来ない検討事項であつたかと思う。

## 五

八歳 はづかしながら文言葉

少年期の世之介

世之介は山崎の姨おばの所に来ている。その娘おさかに恋文を渡す話である。

小学に入る年という事で、近くの滝本流をよくする指南坊に弟子入りさせられるが、その最初の日に、いきなり世之介は手本紙を捧げて、「はゞかりながら文章をこのまん」と言う。手習の初めはいろはと決まったもの、それをいきなり、手本に文章を書いてくれと弟子の方から注文したのだから、師匠が驚いたのは無理もない。「さはいへ、いかゞ書くべし」と、何しろ大金持の令息の事であるから、一応丁寧に尋ねると、「今更馴々しく御入候へ共」以下、長々と口述するのが恋の文面。あきれ果てた師匠、それでも途中までは言われる通りに書いたが、余りの事に、「もう紙もない。まずこれ位の所でやりやれ」と打ち切り、外にいろはを書き与えて、漸く正規の手習となった。

ところでその文章は、子供らしい所もあるが、なかなか意を尽くした堂々たる候文で、とても子供のものとは思えない。前章での世之介の猛修行ぶりを知っている読者には合点が行くが、初対面の師の坊には、まさか目の前の子供がそんな怪物であるとは思ひも寄らないから、何かどこかで頼まれた文章でもあるのか、父親の影さえ散らかねば気軽に事情を尋ねる事も出来たであろうが、それも遠慮してしまうと、「大形の事ならねばわらはれもせず」と戸惑うばかりである。勿論この子供が、これを自分の恋のために実用するとは思ってもしなかった。

しかし姨の家へ帰った世之介は、下女を通じて従妹にそれを届けさせる。差出人の名前までは書き上げていない恋文だから、それから騒ぎとなり、紛れもないその筆跡から師の坊がとんだ濡れ衣を着せられる羽目になる。

世之介が姨に告白したので、その誤解は直ぐに解けたが、今度は世之介が笑われる事になった。まだ自分ではいろはも書けないのに、滝本流の師匠に口述筆記させた恋文を届けさせるとは全く奇想天外である。姨は妹（世之介の母）にも知らせて、京でも大笑いさせてやろうと弾んだが、急にそれは取り止めた。娘おさかは既にさる方に縁談が決まっていたのであるが、世之介の気持を知り、その文才とその奇想天外な実行力に思いを致すと、笑いが感嘆に変わって行つたのであろう。「年だに大形ならば世之介にとらすべきものを」と思い、その後改めて世之介を観察してみると、「みるほど黠こぎましき事にぞありける」。見かけは子供でも、心は既に端倪すべからざる域に達しているのであった。

# 九歳 人には見せぬところ

世之介は鞭を習つても、「松風」の「跡より恋の責くれば」の所ばかり明け暮れ打っている始末。親も耐え兼ねて、母方ゆかりの両替商春

日屋に銀見習いに派遣する。早そこで死一倍で三百目の借り手形をこしらえたというのだが、彼の身分としては金額も小さいし、遊興費調達の手段として屢々使われる手段という事で、実感派らしく一つの経験として借りて見たものであろう。

その五月四日の夕べ、四阿屋あまつやの屋根から遠眼鏡でこの店の中居女の行水を覗き見る有名な場面となる。その時何を見かけたのか、手を合せて拝む女を脅迫して、夜中にその床に忍び込む。と言っても、まだ「本の事」に及ぶわけではないから、女は芥子人形その他の玩具を出してもてなし、ごまかそうとするが、世之介は嬉しそうな顔もせず、

幘やがて而子をもつたらば、それになきやます物にもなるぞかし。此をきあがりそなたにほれたかしてこけ懸る

などと言って、膝枕に寝転ぶ。幾ら何の事もないとは言っても、人が見ればよもやたゞとは見まいと女は気が気でなく、遂に世之介を抱き上げて彼の乳母を呼び出し、

御無心ながらちゝをすこしらひましょ

と、赤ん坊扱いで撃退してしまう。事情を聞いた乳母は大笑い。苦手の乳母に暴露され笑われて、これは世之介にとって面目丸潰れの事件であった。

この章、死一倍の借金といゝ、遠眼鏡の覗き見といゝ、脅迫の床入りといゝ、不良じみた行動が集中して現われる。世之介の色道修行が悪の世界にも手を広げたという事であろうが、最後に何の苦もなくやられてしまう所、貴重な試行錯誤の一端と評価すべきなのであろうか。

#### 十歳 袖の時雨はかゝるが幸

黠こざかしき事十歳の翁と称される程に色道向上をなし遂げた世之介、今度は若道に関心を向ける。もとより生れつきうるわしく、下坂小八がかりに髪を整えれば、その面影何とも情らしく、見事な若衆ぶりなのであるが、如何にせんまだ子供、誰もその方の関心から声を掛けてくれる人もない。

ある日暗部山に小鳥狩に行つて雨に遭い、袖笠して麓近くまで帰つて来ると、後から傘をさし掛けてくれる男がある。

「是はかたじけなき御心底、かさねてのよすがにも御名ゆかしき」と申せど、それには曾かつて而取あへず御替草履をまいらせ、ふところより櫛

道具えもいはれぬきよらなるをとり出し、つきぐのものにわたして、「そ、けたる御おくれをあらため給へ」と申侍りき。時しも此うれしさいか計あるべし。

と、至れり尽せりの親切である。こういう人にこそ衆道の契りをと世之介は言葉を尽して口説くが、男は思いの外一向に取り合わない。やつの事で再会の薄約束に漕ぎつけるが、実は男には命をかけた若衆がいたのであった。その若衆がこの事を聞いて、

「又あるべき事にもあらず。我との道路を忘れずとや。さりとはむごき御こ、ろ入、いかにして捨置べきや」

と大いに世之介に同情し、その男を世之介に譲って、自分は身を引いてしまう。

若衆から念者を口説くという逆様事を試みた世之介であったが、相手が悪かったというべきであろう。衆道の義理は手管や哀願で破れるものではない。それにしても相手の若衆の同情心・義侠心、つまり粹は更にその上を行くものであった。世之介は結果的には思いを遂げた事になろうが、二重に敗北を喫したと言ふべきである。そういう敗北の上に得た恋を、世之介ともあろう者が喜んだとは思えない。これも世之介にとってはまことに厳しい経験であった。

## 六

### 十一歳 尋ねてきく程ちぎり

これまで一対一の恋のみを追求していた世の介は、この年に至って初めて色町へ出かけ、不特定多数の中から恋人を選ぶ経験をする。初めての事であるから、案内人が選定される。唐物屋の瀬平という男である。行先は伏見撞木町、手軽な遊び所である。

瀬平の案内で見巡るうち、みすばらしい宿に一人の女を見かける。言葉数少なく、人に見られない風情もない、筆を持って独り句を案じているような女郎である。

断りなしに腰をかけて、見れば見る程良い所の多い女である。色々話しかけて身の上を聞けば、この里の暮しも頼み少ない明け暮れ、行末の事も恐しく、里の親とも音信不通と言ふ。その親里はと聞けば、「山科の里にて源八」と語る。それでは近々訪ねてお前の無事を知らせ

てやろうと言つと、彼女は嬉しそうな様子もなく、

「かならず／＼御尋は御もつたいなし。はじめの程は赤根など掘りてありしが、今はおとろいて往来の人に袖乞して、然も因果は人のきらひ候煩ひありて」

と断るのであつた。

一夜を共にし、起き別れてから早速山科を訪ねて見ると、柴のあみ戸に朝顔をやさしく作り、鎗一筋、鞍もほこりを払い、朱鞘の一腰を離さぬ立派な浪人、挨拶の後女の事を告げると、

「いかに女なればとて、其身になりて我を人にしらせ侍る事口惜し」

と涙を流す。世之介は親子の心意氣に感じて程なく娘を身請して山科へ歸してやり、なお見捨てずに通つたという。

まず注目すべきは、初めての色町で、見かけの悪い宿から見所多い女をさつと見付ける眼力である。世之介のこれまでの実感修行空しからず、的確な勘が働くようになっていゝらしい。

話し合っている中に、いよくその勘が正確だった事がわかる。その女への信頼から、女が「人の嫌う病がある」とまで言つて行かせまいとした父親を訪ねる氣になつたのである。訪ねた結果は益々感動的であつた。世之介は前章の若衆の粹を返すかのように、この親子に尽してやる。

「廿八品」第七暫偽品・溺愛相に言ふ、

溺愛相といふは、女のこくるにしたがひて愛におぼるゝ。是よりさきだに愛せぬにはあらねど、女より心のうつり来るを始て身にうけては、おもしろさはわきへなりて、むさと過分になり、其者に不便でき、金銀におしげもなく、身上のかたふくをもいとはず、世間のおもはくをもちへりみず、是よりやめがたき道のかぎりとはなる。

世之介にはそこまでの執着はないし、女の方もそれほどたれかゝつて来るような態度ではない。だからこの品には当らないであらう。世之介が突然粹になつたのを不思議に思う向きがあるかも知れない。彼はこの場合、女の無欲から學んで、自分本位の恋をしない事を得たようである。それが結果的に粹と同様の形をとる事になつたらしい。

恋の品格は恋人それぞれの品格に関わっている。

十二歳 ぼんのうの垢かき

須磨で十三夜の月を賞し、塩屋で若い蟹人<sup>あまびと</sup>を招いて行平の昔を偲び、兵庫で風呂屋女忠度という秀句をよく言う女と一夜を共にするが、余りの柄の悪さに辟易する。この章はその風俗描写が中心であり、世之介の諸州遍歴の端緒と言えよう。

恋の品格は相手次第であるが、どのような相手をも受容出来るのが好色スーパーマンだとしたら、この章も世之介の色道のスケールを広げる貴重な経験と位置づける事が出来るだろう。

しかしこういう風呂屋女の中から、かつて勝山という名妓が出て、吉原に出世したという話が最後に付いているのは、こういうガラクタの中にも奇蹟的に珠玉が発見出来る可能性を見ているのだろうか。そういう可能性の予感が、世之介の貪欲な好色遍歴を支えていると見る事が出来るかも知れない。

十三歳 別れは当座はらひ

世之介も声変りして、大人らしい風姿を整え、清水八坂を散策する。小者上りの若い者が案内人のようである。こゝでも風俗描写が生きていて、所の風格が紹介される。

既に相当の色遊び経験を積んだ世之介は、こゝの茶屋女に対しても毫も気怯れを見せない。それどころか、

「かくしばかりの事も一世ならずくはんさまのお引合、未々馴染で、若又お中にやうすが出来たらば、近所にさいはい子安のお地蔵は御ざり、大義なれど百の餅舟は阿爺<sup>と</sup>がするぞ。機遣<sup>きづかひ</sup>なしに帯とけ」

と、女には全く口を開く暇も与えず、悪巧<sup>わるこづ</sup>の限りを尽して、征服してしまふ。

海千山千の茶屋女もこう出られては雌伏するしかない。そこで逆にこんな手を使って来る。うちとけて後、さしうつつむいて物を言わず涙ぐみ、しめやかな物腰で思い出話をする。自分は前の出替りまではさる宮様の所にお仕えしていたのだが、その宮様がふと忍んで来られて



お情を受けた。その宮様と貴方は生き写し。何事にも良く気がつく方で、衣食住各般に渡って手厚い御援助を頂いた事が忘れられない。貴方もよろずに気のつきそうなお方、ひとしおおいという思います。

遠まわしのつもりでも、こう露骨にやられては世之介程の者、引つかゝる筈がない。虚々実々、色道の周辺にはこのような巧妙な仕掛で、悪徳すれ／＼に生きている世界があるのである。

これで巻一の七章は終る。先の悪巧でもわかるように既に世之介は「本の事」が可能な時期を迎えている。少年期もそろ／＼このあたりで終りと見て良いであろう。

「恋は闇」を誤解した七歳から、世之介は懸命な自己開発を続けて来た。それは同時に外部の多様な世界との接触及び発見の過程でもあった。「都の人たらし」と呼ばれる八坂の茶屋女を軽くないなした世之介十三歳、無上の素質と絶好の環境に恵まれ、知的探究と実感の裏付け、更に豊富な実践を経て、漸く此処まで達したのである。一般常識から見れば確かに異常な早熟である。しかし西鶴はそれをこゝまで現実的に可能と思われる姿に表現したのである。

(完)

#### 注

- 1 野間光辰・『定本西鶴全集』第一巻・解説
- 2 野間光辰・『西鶴五つの方法』・『西鶴新々攷』所収
- 3 阿部次郎・『好色一代男おぼえがき』・『徳川時代の芸術と社会』所収
- 4 暉峻康隆・『西鶴 評論と研究』上
- 5 この章数も偶々「廿八品」の品数と合っているのではなく、恐らくは源氏物語の五十四帖を章数と合せたのと同じ位の意味は持っているであろう。
- 6 暉峻康隆・『好色一代男の世界(1)』・NHKブックス『好色物の世界』所収
- 7 6と同じ
- 8 広末保・『西鶴におけるロマンスの生成と挫折』堤精二『西鶴における人間発見』共に国文学解釈と鑑賞・一九九三年3号
- 9 浮橋康彦・『好色一代男』の作品構造―「型」の分析による―・『近世・近代のことばと文学』所収
- 10 森山重雄・『西鶴―人間喜劇』・『封建庶民文学の研究』所収他、9論文等